

コミュニケーション研究の視点

——研究対象としてのコミュニケーション場面^①——

笠原正秀

はじめに

“コミュニケーション”ということばは、研究者やその道の専門家ばかりでなく、一般の人々の間でも広く使われているのは周知の通りである。しかし、「コミュニケーションとは何か？」ということになると、このことばの持つ概念や意味は明確になっていないのではないだろうか。時にマス・メディアと関連したことばとして認知されたり、人間関係や対人関係などを指すことばとして使われたりしている。近年では、“ことばそのもの”あるいは“話すこと”や“しゃべること”を意味しているかのように理解されているようである^②。こうした解釈の多様さからもわかるように、コミュニケーションの意味するものは非常に曖昧であり、不明瞭で広範囲にわたっているといえる。

本稿の目的は、このように非常に身近なことばであるにも関わらずあまりはつきりとせず、近年に至っては社会生活全般の中で非常に重要な役割を果たしている“コミュニケーション”というものを意識して見てみようというものである。改めて見つめ直すことで、

この曖昧模糊としたコミュニケーションというものの輪郭がうつすらとでも見えてくるのではないかと考える。

一、コミュニケーションとは……

一、一、コミュニケーションの不可避性

あなたは、日常のコミュニケーション活動を意識して行っているであろうか。その答えは否であろう。もちろん、意識的に行われるコミュニケーション活動もあるが、そのすべてを意識して行うことは不可能なことである。その理由として、人とコミュニケーションの関係性を示した公理に次のようなものがあるので示しておきたい。“One cannot not communicate.”[人はコミュニケーションしないわけにはいかない(著者記)](Watzlawick et al., 1967, pp. 48-50)。これは、コミュニケーションの不可避性を示したことばで、文法的な視点からみるとおかしな文ではあるが、この文の意味は、ある行動を起こした側(message sender)にその意図があろうがなかろうが、受け取る側(message receiver)がその行動に何らかの意

味づけを行ったとするならば、コミュニケーション価が生じたことになるということである。こうしたコミュニケーションの無意図性の側面がある限り、コミュニケーション活動のすべてを意識的にやっている人などいるはずがないのである。

前述のように、コミュニケーションあるいはコミュニケーション活動を日常生活の中で常に意識しているということなどあり得ないのであるが、そうした日常の中で「コミュニケーション」ということばが前面に躍り出て取り上げられるような時がある。しかし、残念なことではあるが、そのような状況の多くは何らかの問題が生じた時のようである。「コミュニケーション」をキーワードにMSNのニュース検索 (<http://news.msn.co.jp/home.armx>) を行ったところ、二〇〇三年十一月八日から同年十二月八日の一ヶ月の間に三十四の記事が抽出された。つまり、一日あたり一件強の割合で掲載されていたわけである。もちろん、そのうちのいくつかはメディア・ツール開発の記事であったりもしたが、多くのものは次に掲げるようなものであった。代表的な三記事をここに紹介する。

技師と医師に意思疎通不足Ⅱ弘前病院の放射線事故で報告 ―検討委

青森県弘前市の国立弘前病院（伊藤文也院長）で、患者に治療用の放射線を過剰に照射していた事故で、厚生労働省東北厚生局の「事故に関する検討会」委員長の山田省吾・東北大学大学院教授らは十日、原子力安全委員会に調査経過などを報告した。

山田委員長は事故の原因に、治療を担当した医師と放射線技師のコミュニケーション不足があったと指摘した（傍線は著者記す）。

（二〇〇三年十一月十日、JIJI PRESS' <http://www.jiji.com/j/>

久保ドラゴンゴール二発／ 待望のストライカー誕生

「久保はコミュニケーションに問題があったが理由がわかった。彼は十三世紀の生まれで冷凍保存されていた。それがポランド戦で解凍された」。〇二年日韓共催W杯を控えた昨年三月、トルシエ日本代表前監督に、独特の言い回しで評された。

あまりに寡黙な性格が連係不全を招き、世紀の晴れ舞台を逃す一因となっていた（傍線は著者記す）。

（二〇〇三年十二月五日、サンスポ' <http://www.sanspo.com/upper.html>）

選手と交流図ると、ダイエー球団会長が就任会見

小久保裕紀内野手の移籍問題で、背景に選手とフロント間に意思疎通の不足があったとして、それを補うための人事。佐々木会長は「日常から選手とコミュニケーションを取り、チームが強くなる環境作りを図りたい」と抱負を語った（傍線は著者記す）。

（二〇〇三年十二月五日、YOMIURI ON-LINE' <http://www.yomiuri.co.jp/>

yomiuri.co.jp/)

これらの三記事を見てもわかるように、何か問題が生じて初めて意識させられるのがコミュニケーションのようである。また、何か問題が生じると、その原因は何でもコミュニケーションのせいになされてしまいそうである。良きにつけ悪しきにつけ、人間の日常生活とコミュニケーションとはちょうど空気（酸素）のように、あつて当たり前、ないことなど考えられない、切っても切り離せない密接な関係にあることがわかる。

ここ数年、「コミュニケーション」ということばが、ひときわよく使われているように感じられる。これはとりもなおさず、コミュニケーションを意識しなければならぬような出来事が日常的に多々生じていることの表れでもあり、またこうした事例からもコミュニケーションとは何だろうかと考えさせられるものである。前出の事例の場合、それぞれの記事で使われている「コミュニケーション」とは何を指しているのだろうか？ どういうことを「コミュニケーション」として考えているのであろうか？ 非常に多義的であるように思われる。

一、二、コミュニケーション言語活動か？

二〇〇二年度、二〇〇三年度の二カ年にわたり「英語のコミュニケーション方法」（著者担当講座）の中で、「コミュニケーションとは何か？」「コミュニケーション上手と思われるマス・メディアに登

場する人物（芸能人含む）をあげなさい」という質問を投げかけると、その答えの多くが、「話しのうまい人」「立て板に水のごとくしゃべる人」など、どうもイメージとして「ことば」、特に「話すこと」「しゃべること」と密接につながっているようである。^③しかし、効果的なコミュニケーションとは、はたしてそういうものであるうか。また、こうした要素ばかりがコミュニケーション活動の中核であったり、このような点に長けている人が本当の意味でコミュニケーションのうまい人であったりするのであろうか。

社団法人公共広告機構A Cは、左掲のような「抱きしめる、という会話」（企画・制作 東京博報堂）と題したC Mを放映している。^④このC Mのコンセプトは以下のようなところにある。

子どもたちが親の愛情に見守られながら、すくすくと育っていく。それが社会の基本です。しかし、今の日本は、育児放棄や幼児虐待など、親子の関係がとても危うくなっています。わが子とどう接すればいいのかわからない、そんな若い親たちも増えています。そこで、もともとシンプルな、けれどことば以上に雄弁なコミュニケーションとして「抱っこ」を取り上げました。「抱きしめる」という、誰にでもできる愛情行為を通じて、親世代の子育てに対する意識を喚起していく作品です（傍線は著者記す）。

「抱きしめる、という会話」（<http://www.ad-c.or.jp/2003>）

そして、以下のナレーションが次のような映像1～3に添えられている。

「自分の子供なのに愛し方がわからない」。

「まず、子供を抱きしめてあげて下さい」。

「公共広告機構です」。

「抱きしめる、という会話」(<http://www.ad-c.or.jp/2003>)



映像1



映像2



映像3

自分自身を抱え込むように立ちすくむ若い母親(映像1参照)。これは自己防衛およびコミュニケーション拒絶の姿勢である。戸惑うまなざしの女の子。このまなざしだけで十分に子供の心の戸惑いを伝えている。やがて母親は腕を崩し、しっかりと子供を抱きしめる(映像2、映像3参照)。このCMにナレーション以外のことはまったたく介在しない。映像の中でも親子の間に交わされていることは一言もない。あるのは「抱きしめる」という行為だけである。しかし、この両者の間にはしっかりとコミュニケーションが成立し、

その様がテレビ画面のこちら側にいる聴視者の側にも伝わってくる。まさにコミュニケーションしているのである。この「抱きしめる」という行為は、ことば以上に雄弁なコミュニケーション行為として、対象である相手にもまたその行為を目にする第三者にも意味づけられるものである。

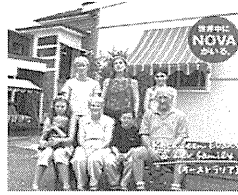
二、異文化コミュニケーションとは……

二、一、「異文化コミュニケーション」ということばは市民権を得たか？

『異文化コミュニケーション』。近年、ようやく広く浸透したと思われることばではあるが、はたして正しい理解がなされているのだろうか。この分野の研究者ではない一般の人々に「異文化コミュニケーション」ということばを聞いたことがありますか？」という質問を投げかければ、その多くの人々が「ある」と答え、また「どこで聞きましたか？」という問いに、そのほとんどの人が「CM」と答えるであろう。事実、二〇〇三年十二月十三日に行われた『梶山フォーラム』でも、同様の質問を聴衆に投げかけたところ、その質問に対する答えとして「CM」という声があがり、その答えに多くの方々がうなずく姿を確認することができた。こうしたことから、このことばを広く一般に浸透させたいならばんの貢献者は語学学校のNOVAといえるのではないだろうか。

NOVAのCMで、初めて「異文化コミュニケーション」という

ことばが使われたのは、二〇〇〇年に行われたシドニー五輪の時のものである。^⑤ 次の映像は、NOVAのCMで初めて「異文化コミュニケーション」ということばが登場したものの一つである。「異文化コミュニケーション」ということばが、CMの中で次のように使われている。「オリンピックは「異文化コミュニケーション」の祭典（映像6参照、傍線と）」「は著者記す」「JOCキャンペーンCM」（NOVA、二〇〇〇）である。



映像4



映像5



映像6

CMそのものは、以前、日本のNOVAで働いていたオーストラリア人講師が流暢な日本語で日本選手団を応援、あるいは日本人に日本人選手の応援に来豪を呼びかけるというものであるが、重要なのは、おそらくこのCMが初めてマス・メディアで「異文化コミュニケーション」なることばを使ったところにある。つまり、NOVAのCM以外に「異文化コミュニケーション」ということばがマス・メディアの中で聞かれることはこれまてなかったと言っても過言ではない。近年、類似のことばとして、俳優の森本レオ氏（二

〇〇二）から「異文化交流」ということばがマス・メディアを通して躍ったが、NOVAのCMは森本氏の発言よりも二年以上も前に登場しているのである。

その後、「異文化コミュニケーション」ということばが改めて登場してくるのは、二〇〇二年に放映された、やはりNOVAのCMである。次の映像7～9は、二〇〇二年に放映されたものである。^⑥



映像7



映像8



映像9

画面に白抜きで文字で言語名（例、「英語を話す」、「イタリア語を話す」、「フランス語を話す」）が表示される（映像7参照）。ネイティブか？ と思えるほど流暢な英語、イタリア語、フランス語等が聞こえてくる。画面にそのしゃべっている人物が映し出されると、それは日本人であったというものである（映像8参照）。また逆に、日本人が話しているのかと思えるほど流暢な日本語が聞こえてくる。実は、話していたのは外国人だったというものである。そして、このCMには大阪を本拠地としている企業らしくオチがついている。最後に、非常に流暢な関西弁が聞こえてくる。実は、話していたのは

宇宙人だったという設定である(映像9参照)。そして、このCMの最後に登場してくる宇宙人が、次のような決めセリフを言うのである。ここでは二例だけ紹介する。

「いや、ホンマね、オレみたいなオッサンがこんなこと話すのも何か変やねんけど、やつぱりいいよね。異文化コミュニケーションちゅうのかな。人は見かけとチャイまつせ。(傍線は著者記す)」。

「顔とコトバ編」(NOVA、二〇〇二)

「異文化コミュニケーションちゅうのは、おんなじ星の上で生きている喜びを分かち合おうちゅうことやで。ギャグちゃうで。お互いを認め合おうや。(傍線は著者記す)」。

「顔とコトバ編」(NOVA、二〇〇二)

これらのCMのおかげで、「異文化コミュニケーション」ということばは広く一般に浸透したことは事実であろう。しかし、こうしたCMが「異文化コミュニケーションとは何か?」というもつとも基本的な命題に対して正確に答えたであろうか。まさに、聴視者と正しくコミュニケーションできたのであろうか。その答えは否である。聴視者の多くが、「異文化コミュニケーション」英会話や外国語での会話力」という印象でとらえてしまったのではないだろうか。異文化コミュニケーションとは、外国語の運用力や会話力のことであろう

か。また、逆をいえば、外国語の運用力や外国語での会話力があれば、異文化コミュニケーション上の問題を克服できるのであろうか。この問いに答えるために、次節では異文化コミュニケーションの現場に焦点をあて、そのいくつかの事例を紹介する。

二、二、異文化コミュニケーションの現場―事例紹介―

本節では、著者の講座で使用しているテキストおよびVTR教材、あるいはテレビCMの中から抜粋した三つの事例を紹介し、こうした事例から異文化コミュニケーションは外国語運用能力だけの問題であるのか? という点を検証する。また、研究対象としての異文化コミュニケーションは、どのような場面に焦点をあて、どのような切り口から研究するものなのかを提示する。

二、二、一、事例―Muro (2001) より―

This is the respond of one of my students, otherwise quite fluent in English, who had gone to Indonesia to plant trees during her summer vacation:

Teacher: Tell me how you planted trees in Indonesia.

Student: The Indonesia government...

Teacher: Keiko, I asked you about the trees, not the Indonesian government.

(Muro, 2001: 42)

事例一は、Muro (2001) からの引用である。Muro 氏は六歳から約二十年にわたり海外で生活し、教育を受けてきた人物である。いわゆる国際(的)人(間)が日本に戻り、日本の生活に再適応する中で出会った様々な困難や誤解を紹介している。彼女は、国際基督教大学付属高等学校で教鞭を執り、同時に帰国生に対するカウンセリングなどを行っていた。その後、慶應義塾大学や国際基督教大学大学院などでも教鞭を執っており、事例一もそうした経験の中で出会った出来事の一つである。

この事例から見えてくるのは、英語力の問題であろうか。その答えは否である。本文中にも示されているように、この学生は、“other-wise quite fluent in English”である。にもかかわらず、何がこうしたコミュニケーション上の歪みを生じさせてしまうのであろうか。ただ、この日本人の発話を日本語で考えてみてもらいたい。いかがであろうか。日本語でのやり取りとして考えた場合、あまり違和感のない発話であるにもかかわらず、Muro 氏には何かおかしいと感じさせるものがあつたのである。それは何であろうか。そこに異文化間におけるコミュニケーションの難しさがあり、そこに焦点をあて解明していくのが異文化コミュニケーション研究なのである。

二、二、二、事例二「キンチョーします」(佐川急便Eコレクト、二〇〇三)⁷――

日々何気なく視流してしまっているCMのなかにも異文化コミュニ

ケーションの視点から視ることのできるものがある。次の事例は、そうしたものの一つである。出典は、佐川急便Eコレクト(二〇〇三)からである。

このCMでは、佐川急便のドライバー(D)と荷物の受取主である外国人(F)との間で、次のような会話が展開されている。

D「佐川急便です。Eコレクトでお申し込みの商品ですので、カードでお支払いいただけます。」

(受取主が日本人でないにもかかわらず瞬間、冷や汗が……)

F「……(無言)」

(一気に冷や汗が始める)

D「え、リボ払い、一括払い、分割払いができます。」

F「……(無言)」

(ますます冷や汗が出てくる)

D「ア、リボ……、リボ払い、PAYね。OK。」

(日本語が完全に変になってしまっている)

F「よくわかります。リボ払いでお願いします。」

(カッコ内は著者記す)

「キンチョーします」(佐川急便Eコレクト、二〇〇三)

いつものように宅急便の配達をするドライバー。ところが配達先で玄関先にでてきたのは、肌の色はやや浅黒く、髪型はアフロヘアで口ひげをたくわえた見るからに外国人（映像10参照）。そのドライバーは急に弱腰になって、冷や汗をかきながら英語（カタカナ）交じりのしどろもどろの日本語となってしまう（映像11参照）。すると、その外国人は流暢な日本語で、「よくわかります……」と、そのドライバーにこれまでのやり取りは理解していることを伝えるというものである。

個人的に、非常によくできたCMと評価している。そして、このCMのタイトルは「キンチョーしてます」である。非常にうまいタイトル付けと感心させられる。おそらくこのCMは、日本人の多くが共感を持って見たものと思う。しかし、なぜこのドライバーはこんなにもキンチョーしてしまったのであろうか。ことばの問題か？否である。両者の間で交わされていることばは日本語だけである。にもかかわらず、これほどまでにドライバーが狼狽してしまった原因はどこにあるのだろうか。まさに、事例一同様、異文化コミュニ



映像 10



映像 11



映像 12

ケーションの現場として焦点をあて分析する対象となり得る場面である。

二、二、三、事例三「学生寮はだれのため」（監修 久米昭元、神

田 外語大学異文化コミュニケーション研究所、一九

九三）

最後は、神田外語大学異文化コミュニケーション研究所により制作された異文化コミュニケーション教育用の視聴覚教材からのものである。VTRの内容は次のようなものである。

郭さんは中国から経営学を勉強しに日本にやってきた大学院生。現在、博士課程に在籍し、博士論文を執筆中である。留学生であるため、その大学にある留学生会館で二カ年生活していた。しかし、留学生会館に留まるのは二年間であるため、その後は出なければならぬ。民間のアパートなども探したが、外国人であるため保証人などの問題からなかなか部屋を貸してもらえない。そんな時、郭さんの日本人の友人から日本人用の学生寮に一室空きがあるという話を聞く。早速、学生課で学生寮に入らせてもらえるよう交渉をするのであるが……という話である。

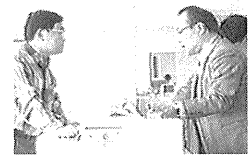
学生寮はあくまでも日本人学生のためのもので、留学生は入寮できないと主張する学生課（映像13参照）。それに対して、留学生もこの大学の学生である、ゆえに寮に入る権利があると主張する郭さん。規則は規則として郭さんの入寮希望を断ろうとする学生課に対して、部屋が空いているのに使わないのは合理的でないという郭さん



映像 13



映像 14



映像 15

(映像14参照)。どこまでもかみ合わない議論の末、学生課のそれなりの立場にある人物が現れ、(映像15参照)各部署に問い合わせた翌週その結果を郭さんに伝えるということでビデオは終了する。

ここに登場する郭さんは中国人であるが、使用している言語は日本語である。また、学生課窓口の人たちが使用している言語ももちろん日本語である。ことばの平等性の観点からいえば、明らかに郭さんの方が不利な立場にあるはずである。しかし、交渉の流れは明らかに郭さんに主導権があり、ぐいぐいと押し込んでいるのに対し、学生課側の日本人職員の議論は上滑りなものとなり、空転してしまっている。

また、客観的に見た時、日本人がこうした場面、こうした状況において、郭さんのようにここまで固執する議論の展開をするであろうか。そして、翌週、郭さんが学生課の窓口で聞くことになる結果がどのようなものであるか、日本人には相当程度予測がつくのはなぜであろうか。しかし、郭さんは期待を持って、その翌週学生課の窓口に来るであろう。日本人にはそこまで予測がつくにもかかわらず

ず、なぜ郭さんにはそのことがわからないのであろうか。こうした疑問点こそが、異文化コミュニケーション研究の視点なのである。

本節では、三例にわたり異文化コミュニケーションの現場を指摘、概観してきたが、各例とも、あえてその解答ともいえる視点について指摘することはしなかった(そのヒントともいえる鍵概念は、「おわりに」で提示する)。それぞれの事例をどの観点からどう視るか、どう分析するか、それこそがコミュニケーション研究の多様性であり、読者ひとり一人にその問題点の切り出し方をお任せし、考えていただきたいと思う。また、それが本稿の目的でもある。

おわりに

本稿では、「コミュニケーションとは何か?」と問題提起を行い、その過程で得た知見をもとに、近年非常に良く耳にし、市民権を得たとも思われる「異文化コミュニケーション」ということばについて考える機会を持った。そして、これらのことからコミュニケーション研究および異文化コミュニケーション研究とはどのような場面に焦点をあて調査研究をするものなのかを考える機会を提示した。

概して、「コミュニケーション」ということばからは「話すこと」や「しゃべること」が連関するイメージのようであるが、はたして本当にコミュニケーションとは「話すこと」や「しゃべること」ばかりをいうのであろうか。その点を概観するために、インターネット(MSN)に掲載されている新聞記事を過去一ヶ月間(二〇〇三

年十一月八日(同年十二月八日)にわたり検索し、どのような場面で「コミュニケーション」ということばが使われているか、その代表的な記事を三本採り上げた。そこから見えてきたものは、「コミュニケーション」ということばの持つ意味の広範囲さであった。また、ことば以外(非言語)のコミュニケーションのあり方の例として、現在も放映されている公共広告機構のCMを紹介した。このCMは、人間のコミュニケーションにおいて非言語合図(nonverbal cues)の持つ力の大きさを示すものであった。

次に、「異文化コミュニケーションとは何か?」を考えるために、異文化コミュニケーション場面を三例提示した。一つは著者の講座で使っているテキストの中から、一つはテレビCMから、そして最後に、異文化コミュニケーション教育用に作られたビデオの中から抜粋したものを使った。一例目は、一見ことばの問題のようにも見えるが、実は会話における論旨展開のしかたの相違を採り上げたものであった。二例目のCMも、一見ことばの問題のように見えるが、実は各文化内で規定されている会話構成に付随するルールの違いと、何よりも重要なのは、人間の先入観(prejudice)の問題を提示したものであった。最後に提示したビデオは、中国人と日本人のコミュニケーション場面であるが、日本語だけで構成されており、「外国語のできない人に異文化コミュニケーションは無縁」という概念を覆すものであった。日本国内で日本語だけを使用しているような場面においても、文化背景の異なる者同士が接触する場面では、こうした異文化コミュニケーションが生じることを認識させられるも

のであった。

このように、様々なコミュニケーション場面を提示することにより、「コミュニケーション」ということばの定義や「異文化コミュニケーション」とは何か?」を考えてみた。しかし、「コミュニケーション」ということばそのもの、あるいは「異文化コミュニケーションとは何か?」と定義づけることは、本稿で紹介してきた事例を見てもわかるように、コミュニケーションというものをどのような切り口から視るかにより実に様々な定義が可能であり、包括することなど無理なことなのである。たとえば、Dance & Larson (1965) は一二六の定義を示し、その多様さを示している。また岡部(一九八七)は、Dance & Larson (1965) の示した定義を四つに分類し、深田(一九九八、一九九九)は塚本(一九八五)の定義をもとに十五に分類することを試みている。しかし、いずれも包括的な定義を示すには到っていない。それほどまでにコミュニケーションの持つ意味は広く、そのとらえ方は人により千差万別といえる。

今回、こうした事例を概観することにより、当たり前と思っていた日常生活を少し意識して見つめ直してみると、コミュニケーションの形やあり方が見えてきたのではないだろうか。また近年、「異文化コミュニケーション」ということばもすっかり耳に馴染んできたが、CMにあるように、英語やその他の外国語の運用力や会話力のことであつたらうか。また、英語やその他の外国語の運用力や会話力を身につけることで、外国人とのコミュニケーションは円滑にいくといえるのであろうか。もちろん、そうした側面が異文化コミュ

ニケーションや異文化コミュニケーション研究の一端を担っていることを否定するものではないが、異文化コミュニケーションⅡ（イコール）の形でとらえてはいただきたくない気がする。

国際コミュニケーション学部 国際言語コミュニケーション学科

（異文化・対人コミュニケーション）

注

- （1） 本稿は、二〇〇三年十二月十三日に行われた「梶山フォーラム」で口頭発表した内容をまとめたものである。発表および本稿で使用したCMについては、飯石崇博氏（社団法人公共広告機構東京事務局）、落合麻美氏（東京博報堂）、加藤桜氏（佐川急便京都本社広報室）、倉辺喜之氏（NOVA社長室）（五十音順）の各氏に多大なるご協力をいただいた。また、VTR映像のデジタル処理に関しては名古屋大学大学院人間情報学研究科入部百合絵氏にご協力をいただいた。ここに深く感謝の意を示したい。
- （2） 著者講座「英語のコミュニケーション方法」の中で受講者（六十八名）に回答を求めたところ、四十人（六十五%強）の回答に「会話」「しゃべる」「話す」「ことば」というキーワードが含まれていた。他には、「人と人をつなぐもの」「生きていく上で必要不可欠なもの」という回答もあった。
- （3） 前出と同様。この調査も前出の調査と同日（二〇〇三年十月九日実施）に行っている。学生の回答のほとんどが「話のうまい人」「よくしゃべる人」「司会の上手な人」で占められていた。マス・メディアに登場する人物では、例えば、明石家さんま、みのもんた、久米宏、タモリ、古館伊知郎などがあげられていた。
- （4） 本CMは、二〇〇三年七月より約一年間（二ヶ月程度のズレが生じる可能性あり）にわたり放映予定（公共広告機構東京事務局）。二〇〇四年三月現在も放映中。
- （5） 本CMは三パターン作られ、二〇〇〇年四月から同年十月まで放映さ

れていた（NOVA広報部）。本稿では、そのうちの二パターンを掲載した。

- （6） 本CMは、七パターン作られ、二〇〇二年一月から放映されている（NOVA広報部）。二〇〇四年三月現在も放映中。本稿では、そのうちの二パターンを掲載した。

- （7） 本CMは、二〇〇三年七月四日から同年十月七日まで放映されていた（佐川急便本社広報部）。

- （8） 本VTRは、神田外語大学異文化コミュニケーション研究所が異文化コミュニケーション教育のために、共同プロジェクトとして一九九二年度から一九九六年度にかけ一定間隔で制作してきたものの中の一本である（久米、二〇〇〇）。

引用文献

- 岡部朗一（一九八七）「コミュニケーションの基礎概念」古田曉監修『異文化コミュニケーション―新・国際人への条件』pp. 15-38: 有斐閣
- 「顔とコトバ編」（二〇〇二）NOVA（制作 東北新社）
- 「学生寮は誰のため」（一九九三）監修 久米昭元、神田外語大学異文化コミュニケーション研究所制作
- 「技師と医師に意思疎通不足Ⅱ弘前病院の放射線事故で報告―検討委」（二〇〇三年十一月十日）時事通信社、<http://www.jiji.com/>
- 「キンチョーしてます」（二〇〇三）Eコレクト 佐川急便（制作 ダンスノットアクト）
- 「久保ドラゴンボール二発ノ 待望のストライカー誕生」（二〇〇三年十二月五日）サンスポ、<http://www.sanspo.com/upper.html>
- 久米昭元（二〇〇〇）「異文化コミュニケーション教育用ビデオの開発とその効果―文化対照法を中心に―」『異文化コミュニケーション研究第十二号―非言語コミュニケーション特集号―』pp. 113-130. 神田外語大学異文化コミュニケーション研究所
- 「JOCキャンペーンCM」（二〇〇〇）NOVA（制作 東北新社）
- 「選手と交流図ると、ダイエー球団会長が就任会見」（二〇〇三年十二月五

- 日) YOMIURI ON-LINE' [http:// www.yomiuri.co.jp/](http://www.yomiuri.co.jp/)
 「抱きしめる」という会話」(二〇〇三) 公共広告機構(企画・制作 東京博
 報堂)' [http:// www.ad-c.or.jp/](http://www.ad-c.or.jp/)
 塚本三夫(一九八五)『コミュニケーションの理論と構造』青井和夫(監修)
 佐藤毅(編)『コミュニケーション社会学』(ライブラリ社会学七) pp. 1-
 48. サイエンス社
 深田博己(一九九八)『コミュニケーションの基礎』『インターパーソナル・
 コミュニケーション対人コミュニケーションの心理学』pp. 1-12. 北
 大路書房
 深田博己(一九九九)『コミュニケーション心理学の構築に向けて』『コミュ
 ニケーション心理学ー心理学的コミュニケーション論への招待』pp.
 1-17. 北大路書房
 森本レオ(二〇〇二) 森本レオ「不倫疑惑に『異文化交流です』—二十代の
 画家志望の女性と交際発覚—『ZAK ZAK』二〇〇二年四月二十五日
[http:// www.zakzak.co.jp/ top/ t-2002_04/ 242002042505.html](http://www.zakzak.co.jp/top/t-2002_04/242002042505.html)
 Dance, F. E. X. & Larson, C. E. (1976). Some definitions of communica-
 tion. *The functions of human communication: A theoretical*
approach. pp. 171-192. New York: Holt, Rinehart and Winston.
 Muro, M. (2001). Answer me now! Responding to questions. *Intercultur-*
al Misunderstanding - Tales of a Returnee's Culture Shock- pp. 37-
 43. Tokyo: Seibido.
 Watzlawick, P., Beaven, J. H., & Jackson, D. D. (1967). *The pragmatics*
of human communication. New York: W. W. Norton & Company.
 (日本語の文献資料は五十音順に、英文の文献資料はアルファベット順に掲
 載)

引用映像一覧

映像1〜映像3 「抱きしめる」という会話」(二〇〇三) 公共広告機構(企
 画・制作 東京博報堂)' [http:// www.ad-c.or.jp/](http://www.ad-c.or.jp/)

映像4〜映像6 「JOCキャンペーンCM」(二〇〇〇) NOVA (制作 東
 北新社)
 映像7〜映像9 「顔とコトバ編」(二〇〇二) NOVA (制作 東北新社)
 映像10〜映像12 「キンチョーしてます」(二〇〇三) Eコレクト 佐川急便
 (制作 ダンスノットアクト)
 映像13〜映像15 「学生寮は誰のため」(一九九三) 監修 久米昭元、神田外語
 大学異文化コミュニケーション研究所制作